

1 はじめに

「個別最適な学び」とは何か。この問いは、本研究を進めていく上での大前提となるもので、その解釈により、研究の方向性は大きく変わってくる。このことについて本研究では、中央教育審議会の令和3年答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～を参考にして、「個別最適な学び」を次のように捉えている。

子供一人ひとりの特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」と、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が、学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」とを学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。

研究1年目では、学習アプリを使って「個に応じた指導」に注力してきたが、研究2年目では、「学習者視点」に着目し、学習が最適なものになるように生徒自らが学習を「調整」できるようになることを目標にした。研究3年目では、進路別課題を配信して取り組んだ。学習内容と自分の将来との繋がりを明確にすることで内発的動機づけを刺激し学習への主体性を喚起させることを目標とした。また、学習量などを自分で調整できるようにあらかじめ進路別に課題を配信しておき、生徒には学習計画を立案させた。与えられた課題をこなすだけの学習ではなく「自ら学ぶ力」の育成を図った。

前述した令和3年答申にもあるように、これからの学校においては、子供が「個別最適な学び」を進められるよう、教師が専門職としての知見を活用し、子供の実態に応じて、学習内容の確実な定着を図る観点や、その理解を深め、広げる学習を充実させる観点から、カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図るとともに、これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められている。

2 事業（研究）の概要

(1) 研究主題

ICTを活用した個別最適な学びを通じた学習習慣の定着による基礎学力の向上と主体的な学びの実現

(2) 研究主題設定の理由

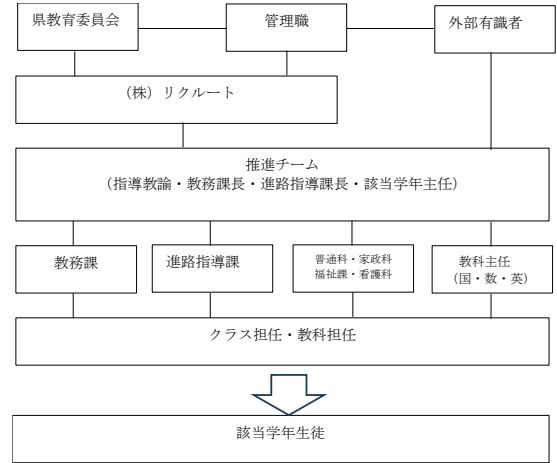
本校は普通科（類型・子どもコース・健康スポーツコース）、家政科、看護科、福祉科からなり、各科の多様な魅力を持つ生徒一人ひとりが夢や目標を実現することを目指している。生徒は真摯に活動しているが、興味・関心の方向も、学習習慣・学習態度もさまざまである。その生徒達の潜在的な意欲・資質を引き出し、積極的・主体的な学びを継続する力を養うことで、一人ひとりのキャリア開拓につなげたい。そのためにはICTを活用した効果的かつ効率的な学びの方法を導入することが必要だと考える。

(3) 研究内容

個々の生徒が、自身の能力や理解度に応じた学習を効果的に進めるとともに、興味・関心等に応じた主体的な学習を深め、知識や技能を広げることができるよう、1人1台端末とEdTech等の効果的なICT活用についての実践研究を行う。本研究を通して、「指導の個別化」と「学習の個性化」の2つの側面からのアプローチによる生徒の学習習慣及び基礎学力の定着と学習をサポートする教員の指導力の向上に取り組む。

(4) 研究体制

I C T活用による個別最適な学習を推進するチームを立ち上げるとともに、EdTech サービス「スタディサプリ」を利用するため、開発会社であるリクルート及び外部有識者（大学教員）と連携して研究に取り組む。



(5) 研究計画（当初の計画）

①令和5年度（1年目）

◎学習習慣の定着を図る。

- ・指導教諭を中心とした「ICT活用による個別最適な学習」推進チームを立ち上げる。
- ・教員間の共通理解を深めるため、教員を対象にした外部有識者による個別最適な学びに関する講演会を実施する。
- ・県内外の「スタディサプリ」活用先進校への学校訪問を実施し、導入事例の研究を行う。
- ・リクルートと連携して、「スタディサプリ」の効果的な活用研修を行う。
- ・年4回（4月、7月、11月、3月）、県教委、リクルートとの調整委員会を実施し、事業の進捗状況を確認し、取組についての軌道修正等を行う。
- ・生徒の「スタディサプリ」活用状況と各種テスト、学習実態調査との相関について推進チームによる定期的な分析会を実施する。
- ・生徒面談（年3回）を通して活用状況の実態を把握し、問題点を洗い出し、担任による生徒個々への個別支援や助言を実施する。
- ・1年目の活用状況を総括し、2年目に向けた指導の改善策を検討する。
- ・1年目研究成果発表会を実施し、2年目の研究に向けた意見交換を行う。

②令和6年度（2年目）

◎基礎学力の定着を図る。

- ・個々の生徒に合わせて「指導の個別化」と「学習の個性化」を推進する。
- ・生徒を対象にリクルートによる前年度の活用状況報告会を実施し、好事例を共有する。
- ・年4回（4月、7月、11月、3月）、県教委、リクルートとの調整委員会を実施し、事業の進捗状況を確認し、取組についての軌道修正等を行う。
- ・生徒の「スタディサプリ」活用状況と各種テスト、学習実態調査との相関について推進チームによる定期的な分析会を実施する。
- ・生徒面談（年3回）を通して活用状況の実態を把握し、新たな問題点を洗い出す。担任による生徒個々への個別支援や助言を実施する。
- ・他の研究校（津山商業高校、東岡山工業高校）との情報交換会を実施する。
- ・2年目の活用状況を総括し、3年目に向けた課題の把握とその改善策を検討する。
- ・2年目研究成果発表会を実施し、3年目の研究に向けた意見交換を行う。

③令和7年度（3年目）

◎自己肯定感と自己調整能力を高め、さらなる学習習慣の定着と基礎学力の向上を図る。

- ・生徒面談（年3回）やアンケート調査を行い、生徒の変容を記述する。
- ・学習習慣の定着や基礎学力の定着と、生徒の自己肯定感との関係性の有無を分析する。
- ・担任による生徒個々への個別支援や助言を実施する。
- ・年4回（4月、7月、11月、3月）、県教委、リクルートとの調整委員会を実施し、事業の進捗状況を確認し、取組についての軌道修正等を行う。
- ・他の研究校（津山商業高校、東岡山工業高校）との情報交換会を実施する。
- ・3年目の活用状況の総括に加え、3年間の学習時間の推移と基礎学力の定着を分析する。
- ・3年目研究成果発表会を実施し、3年間の研究成果を発表する。
- ・本研究の成果を県内の他校に紹介し、EdTech サービスの導入を検討している学校に助言を行う。

3 1年目（令和5年度）の取組等

(1) 令和5年度の取組

教職員にはスタディサプリを活用した指導の仕方について研修を実施し、生徒には週末課題として国語と数学の授業動画を配信することから始めた。定期考査前には対策動画を配信し、生徒が意欲的に学習動画を活用し学習に取り組む働きかけを行った。また、7月からは5月に実施した到達度テストのフォローアップ動画を配信し、苦手な部分の克服に向けてスタディサプリの活用を促した。

2学期には問題の回答率が高い生徒が成績上位者に多い傾向があることを確認した。特にDゾーンにある生徒のアプリ使用率が低いことから、12月からスタディアプリをはじめとした家庭学習の在り方を抜本的に見直した。学年団で協議し、指導方針の共通理解、生徒への個別の声掛け等をきめ細かくすることを確認した。生徒に取組表を作成させ、学びの実績を可視化する取組を始めた。また、クラス別のアプリ視聴時間や課題の提出状況を教室に掲示し、生徒に対して外発的動機付けを行った。

3学期にはスタディサプリ活用先進校である高知県の土佐塾中学・高校を訪問した。同校では、スタディサプリを活用した反転学習を理科、数学で実施しており、学習範囲を予習として動画視聴させ、授業では重要な内容をグループ学習でまとめていく取組が定着していた。本校でもスタディサプリの授業等への活用について検討していくことにした。また、1年生を対象に進路実現に向けて学力向上の大切さを意識づけるための講演会を実施した。さらには、1月実施の第2回到達度テストと4月実施のスタディサポートに向けた事前指導として動画配信を行った。

(2) 成果

ア 動画視聴時間・課題提出率の増加

・教科担当や担任による働きかけの効果及びクラス別のアプリ視聴時間や課題の提出状況を教室に掲示した結果、動画視聴時間の大幅な増加が確認された。特に、課題提出率については76%（4月）から94%（2月）に上昇した。

イ 基礎・基本の定着

・テスト後、結果に応じた連動型課題の配信を行い、担任が生徒一人ひとりに個別指導を行った。2月のスタディサポートにおいても、学習到達度Dゾーンの生徒の増加を例年に比べ抑制できた。特に英語においては、教科担任からの働きかけを継続して行き、単語テスト等をやり放しにせず、アフターフォローをした。結果Dゾーンの生徒の減少が確認された。

ウ スタディサプリの授業での活用

・活用研究を通して、各教科や単元の特性に応じた予習・授業・復習での活用も始まった。また、教科横断的な試みや反転学習についても、実践の機会を設けることができた。

エ スタディサプリの活用方針に対する共通理解

到達度テストの事前・事後指導について、学年団で次のように指導方針の共通理解が進んだ。

- ・生徒に出題範囲とその範囲の動画リストを提示
→到達度テストに向けた生徒の準備をサポート
- ・到達度テスト後の連動型課題配信の実施
→全課題の終了を目指して、担任が個別に指導

(3) 課題

ア 到達度テスト

・スタディサプリの仕様が、動画を視聴しなくても課題に取り組めるようになっているので、点数が悪くてもいいと安易に考え、動画を視聴しない生徒が一定数いた。動画を視聴した上で、問題を解くような働きかけをしていくことで連動型課題の効果を高めるとともに、提出状況の改善に繋がる運用を研究する。

イ スタディサポート

・授業における活用には焦点をあてることに主眼をおいたため、生徒の真の学力を育成したとまでは至らなかった。引き続き予習・授業・復習でのスタディサプリの効果的な活用を研究するとともに、スタディサポートの事前指導でのスタディサプリの使い方もあわせて研究する。

ウ 個別最適な学習の実現

・個々の生徒に対する個別支援の徹底が不十分であった。2年生では個々の進路実現に向けた主体的な学習を推進する。具体的には、習熟度別、希望進路別の学習計画をモデル化し生徒に提示する。

4 2年目（令和6年度）の取組等

（1）令和6年度の取組

前年度（令和5年度）の課題として、スタディサプリの動画視聴率は高いが、必ずしも効果的な学習になっていないこと、スタディサポートの学力分布におけるD層が増加していること、個別の支援が不足していることなどが挙げられた。

そこで、本年度は、各教科においてスタディサポートの結果を基に基礎学力を分析し、課題内容の見直しを実施した。また、生徒の学習意欲向上に向けた取り組みを進めるとともに、教員の学習支援力向上を目的とした研修の実施や指導方法の改善にも取り組んだ。

さらに、学習意欲に関する先行研究をもとにアンケート調査を実施し、その結果を分析した。研究の最終年に向けて、本年度の調査結果の分析を行い、より効果的な指導法の確立を目指した。

①基礎学力の分析結果と課題内容の見直し

4月から6月にかけては、到達度テストの結果に基づく連動課題を配信した。また、スタディサポートの結果を基に基礎学力の分析を行い、7月の夏課題から10月のスタディサポートまでの期間にかけては、次の内容（イ）の課題に取り組みさせた。

ア 基礎学力の分析結果

- 英語：全国平均正答率と比較して大きく下回る内容はなかったが、全体的に見ると「リスニング」の問題では全国平均正答率を僅かに下回っていた。一方で、「文法：動詞の時制」および「文法：比較」が全国平均正答率を10%以上上回っていた。リスニング力を高める課題の工夫が求められることが分かった。
- 数学：全国平均正答率と比較して10%以上下回った内容は、「図形と計量」および「図形の性質」であった。一方で「数と式」では全国平均正答率を20%以上上回っていた。1年次の内容に関しては正答率が低く、定期的に復習する機会を設けることが重要だと分かった。
- 国語：全国平均正答率と比較して大きな差はないものの、「現代文知識・技能」「論理的文章読解」「文学的文章読解」においては、7割の問題で全国平均を下回る結果となった。一方で「古文知識」については6割強の問題で全国平均正答率を上回る結果となった。これらの結果から、文章の読解に必要な知識の理解を支援する取り組みをさらに強化することが重要だと分かった。

イ 分析後の課題

- 英語：リスニング力向上を目的とし、スタディサプリの英検対策動画を配信した。文法・文章読解については、市販教材を活用した。
- 数学：1年次の内容に関する得点率が低い生徒の割合が高かったため、1年次の学び直しをスタディサプリアと教員作成のプリントで強化した。
- 国語：現代文の理解において、スタディサプリアの動画のみでは文章全体を見ることができないため十分な学習効果が得られないことが課題となった。自宅にプリンターを所有している生徒の割合が低いため、現代文は教員作成のプリントを活用し、古文・漢文はスタディサプリアの動画を用いる形で対応した。

これら3教科とも、スタディサプリアの配信に加え、教科担当が作成したプリントや市販教材など、学習ツールの多様化を図った。特に、イメージ化による理解の強化や英語発音の聞き取り能力の向上が求められる内容などでは、動画を活用した課題を中心に配信した。

10月のスタディサポートの結果をもとに、基礎学力をさらに分析し、各教科でG T Zの層別課題を配信した。すべての層別課題を全生徒に配信し、生徒自身が自分の学力に応じた課題に取り組めるようにした。また、より上位の層の問題にチャレンジできる仕組みを整え、自ら学習内容を選択し、調整できるよう工夫した。

②生徒の学習意欲向上への取り組み

生徒の学習意欲を高めるため、以下の取組を行った。

ア 講演会の実施

実施日：令和6年7月12日（金）

対象：2年生

講師：川崎医療福祉大学 医療福祉学部 子ども医療福祉学科

教授 橋本 勇人氏

教授 中川 智之氏

川崎医療福祉大学から2名の教授を招き、「頑張ることの大切さ」をテーマに講演を行った。生徒の感想には、「努力しても成功するとは限らない。しかし、努力しないと成功することはないなら私は努力することを選択したい。」といった前向きな意見が多く見られた。このことは、講演が生徒の内発的動機づけに影響を与えたことを示唆していると考えられる。

イ 個別指導の充実（面接週間の導入）

面接期間：4月、9月、2月

個別最適な指導の充実を図るため、新たに「面接週間」を設定した。これにより、生徒と担任がじっくり向き合う時間を確保し、進路指導や学習相談の機会を増やした。面接の記録には「スタディサプリ」のポートフォリオ機能を活用し、生徒が自らの成長を振り返る機会を提供した。また、担任からのコメントをフィードバックできる機能があれば、指導助言の充実につながるという教員の意見もあった。面接を通じて、普通科では専門学科と比較して進路意識の低い生徒が多く、それが学習意欲の低下につながっていることが課題として浮かび上がった。そのため、生徒が自分自身の潜在的な力に気づき、将来の夢を見つけられるような支援の在り方を検討する必要がある。

③教員の学習支援力向上のための取り組み

ア 研修

実施日：令和7年3月24日（月）

内容：自律的な学習を促進するための具体的な戦略や実践的なアプローチについて

対象：本校教職員

講師：岡山大学 学術研究院教育学域 准教授 岡崎 善弘氏

前述した課題を踏まえ、教員を対象とした研修会を計画した。本研修では、認知心理学の知見をもとに、生徒の学習意欲向上のための指導法について理解を深めることを目的とする。

イ 教員授業見学

期間：6月、11月

内容：授業の見どころをフォームで調査を実施し、全教員へ周知。

見学後は、自分の授業に取り入れたいところや感想をフォームで回答。

見学人数：6月64名（延べ）、11月27名（延べ）

教員の授業力向上のために、授業見学の強化を図り、発問の仕方やICT機器の活用、1人1台端末を用いた授業の実践について相互に学び合う機会とした。

ウ 他校の見学、セミナー参加

1) 笠岡市立笠岡小学校

訪問日：令和6年6月20日（木）

訪問者：本校教員2名

2) 和歌山県立有田中央高等学校

訪問日：令和6年6月27日（木）

訪問者：本校教員2名

3) NEW EDUCATION EXPO 2024 大阪

参加日：令和6年6月15日（土）

参加者：本校教員5名

個別最適な学びの実践について理解を深めるため、先進校の訪問やセミナーへの参加を行った。笠岡市立笠岡小学校の授業では、児童が自ら学び方を身につけることを重視し、一人ひとりの進度に応じた複線型の授業が実施されていた。また、児童同士が互いに学び合う場面も多く見られ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体となった授業が展開されていた。NEW EDUCATION EXPO 2024 大阪では、5名の教員が本研究につながるセミナー等に分かれて参加し情報収集を行った。教員による先進校の訪問やセミナーへの参加を通じて得た知見を職員会議で報告し、教員間で共有する機会も設けた。

④学習意欲に関するアンケート調査結果

	安心して学べる環境	欲求・動機レベル			学習行動レベル						認知・感情レベル		
		知的 好奇心	有能 さへ の欲 求	向社 会的 欲求	情報 収集	自発 学習	挑戦 行動	深い 思考	独立 達成	協同 学習	おもしろ さと 楽しさ	有能 感	充実 感
学年全体	2.90	2.91	3.29	3.57	3.03	2.74	2.41	2.91	2.56	3.04	2.81	2.19	3.22
普通科	2.83	2.85	3.25	3.49	3.04	2.68	2.27	2.85	2.48	2.96	2.73	2.10	3.20
家政科	2.94	2.94	3.37	3.70	2.94	2.60	2.26	2.89	2.46	3.03	2.74	1.87	3.21
看護科	2.97	3.03	3.37	3.67	3.09	2.99	2.68	3.12	2.62	3.23	3.03	2.38	3.32
福祉科	2.67	2.63	3.04	3.48	2.70	2.41	2.34	2.57	2.48	2.89	2.54	2.09	2.91

4:「あてはまる」、3:「ややあてはまる」、2:「あまりあてはまらない」1:「あてはまらない」の4段階で調査し4点が最高値とする。

<アンケート調査結果の分析>

自己調整学習のプロセスの中心となる要素は、「欲求・動機、学習行動、認知・感情」であるとされている（櫻井、2024）。また、これらの要素に対しては「安心して学べる環境」が影響を与えることが指摘されている。これらの要素と「安心して学べる環境」との関係について、アンケート調査を基に分析を行った。まず、安心して学べる環境に関する結果を見ると、学年全体の平均値は2.9であった。生徒が自律的に学び自己実現を目指せるような環境が今よりも整うことでより安心して学べる環境をさらに整備し、生徒がより自律的に学びに取り組める環境になると期待できる。次に、欲求・動機に関する結果では、どのクラスにおいても知的好奇心の得点が低く、一方で向社会的欲求が最も高いことが明らかとなった。この結果は、生徒が学びに対する興味関心よりも、他者との関わりや役立つことへの関心を強く持っていることを示唆していると考えられる。向社会的欲求が喚起されることで生徒は自身の得意分野を核としながら将来の目標を形成し、その目標達成に向けて現在の学習への動機付けが高まることが指摘されている（櫻井、2024）。そのため、向社会的欲求を促進しながら、知的好奇心を喚起するための教育的支援が必要であると考えられる。

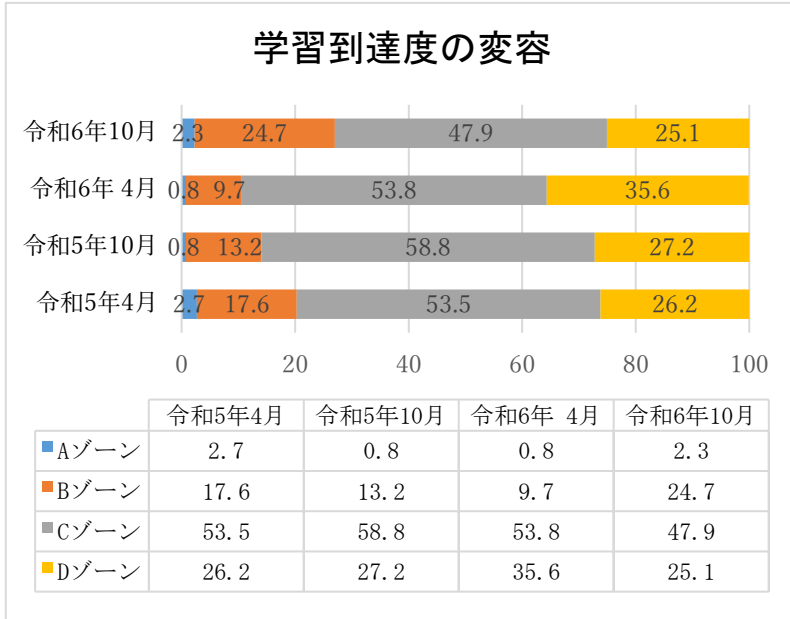
学習行動に関しては、「情報収集」や「協同学習」の得点は比較的高い結果を示した一方で、「挑戦行動」の得点は低い傾向にあった。具体的には、生徒自身が課題に関連する情報を収集し、仲間と協力して課題解決に取り組む姿勢は見られたものの、困難と感じる課題に対して主体的に挑戦する行動は不足していることが分かった。この結果から、今後の課題として、困難な課題にも果敢に挑戦しようとする意欲を高めるための支援が必要であると考えられる。また、これらの学習行動は、生徒の自律的な学習意欲に支えられており、学習意欲のさらなる向上を促すための環境整備が求められる。認知・感情に関する結果では、「安心して学べる環境」「欲求・動機」「学習行動」と比較し最も低い傾向にあった。特に有能感の得点が低いことが明らかとなった。生徒が自身の学びの成果を認識し、有能感を高めるための支援が必要であると考えられる。また、有能感を高めるための具体的な方法の一つとして、振り返り活動の充実が挙げられる。学習成果を一定の基準に基づいて評価・判断する機会を設けることで、達成感を得られ、有能感が高まることが指摘されている（櫻井、2024）。本研究では、課題への取り組み後に生徒自身が振り返りを記録する活動を導入しているものの、その振り返り活動の質を高めるための支援方法をさらに検討していく必要があると考えられる。

今回のアンケート調査結果を基に、振り返り活動の支援のあり方や挑戦行動を促すための指導方法について具体的な検討を行うことが挙げられる。また、今後のデータとの比較分析を通じて、自己調整学習を促進するためにICTを活用した個別最適な学習に関する支援方法の構築を目指したい。

本校には普通科（類型・子どもコース・健康スポーツコース）、家政科、看護科、福祉科があり、各クラスが特徴を持った集団であることから、この分析結果を踏まえた面談を実施していくことで、生徒の学習に対する主体性を向上させ、個別最適な学びの実現につながると考える。

(2) 成果

ア 学習の自律性の向上



令和6年4月実施のスタディサポートの結果、GTZでは、入学当初よりAゾーンとBゾーンの減少、CゾーンとDゾーンの増加が見られた。そこで、生徒と担任との面談の回数を増やしたり授業力を向上させる取り組みや成績を分析し課題内容を検討したりする取り組みをすることにより、生徒が学習に向けて関心を示しだした。また、自分に合った課題を自分で選択し取り組む環境を整えていった。その結果、令和6年10月には、Aゾーンが1.5%増加、Bゾーンが15%増加、Cゾーンが5.9%減少、Dゾーンが10.5%減少した。

イ 生徒の変容

個別追跡調査結果

○普通科

生徒	GTZ 高2 4月	GTZ 高2 10月	到達度テスト 高2 1月 正解率	動画視聴 時間 (令和6年度)	確認テスト 完了 講義数 (令和6年度)
A	A 2	A 2	国語 86.0% 数学 65.1% 英語 81.2%	14時間52分	146
B	B 2	A 3	国語 76.7% 数学 81.3% 英語 43.7%	31時間28分	333
C	B 2	B 3	国語 76.7% 数学 53.4% 英語 56.2%	41時間16分	132
D	C 2	B 3	国語 60.4% 数学 32.5% 英語 35.9%	40時間11分	220
E	D 1	C 3	国語 69.7% 数学 20.9% 英語 26.5%	20時間34分	152

生徒Aは、入学当初から成績も高かった。課題に対する取り組みも良い。2年生になると、課題以外にもスタディサプリの化学基礎を自ら視聴し取り組むなど学習に関して自走できつつある。進路については明確ではないが、今後目指したいものが決まってくるとより意欲も高まり学習時間も増加すると思われる。

生徒Bは、家庭学習習慣がついている生徒である。高校2年1月の到達度テストの英語を除くと到達度テストでも入学時から安定して7～8割の得点をとっている。授業時間以外で、担任が作成した独自の小テストとスタディサプリを併用することにより今回GTZをBからAに上げることができた。

生徒Cは部活動に力を入れており、その実績を活かした進学を考えている。部活動の時間で校内の進路補習を受講できなかったが、「スタディサプリ」を活用し、自主的に基礎学力の向上に努めている。自分のペースに合った学習の取り組みが可能になった。限られた時間の中で効果的に学習を進めるために重点的に学ぶ内容を整理し、集中して取り組ませることで進路実現をさせたい。スタディサプリの取り組み時間が増えたのは、担任、顧問からの部活動と学習の両立について声かけを重ねていった成果である。動画視聴時間は41時間16分と好成績の中では最長であった。生徒Dは、担任との面談を重ねるなかで、栄養士を志望する意識が芽生え、次第にその方向へと関心が向かうようになった。それに伴い、学習時間も確保できている。取り組む姿勢も自分で必要な課題に取り組むなど学習に向かう姿勢の変化が見られた。志望する職業を明確にし、進学先について担任と何度も調査を重ねる中で、学習面でも弱点を克服するためにスタディサプリを活用し、自律的に学習に取り組む姿勢が養われていった。生徒Eは、進路意欲はあるもののまだ将来に目指したい目標が明確にはなっていないが、担任との面談を重ねて学習を習慣化しているところである。働きか

けに対して取り組む姿勢はとても良い。今後は、数学や英語について学習の進め方などを見直していく必要がある。

○専門学科

生徒	GTZ 高2 4月	GTZ 高2 10月	動画視聴時間 (令和6年度)	確認テスト完了講義数 (令和6年度)
家政科F	B 3	B 3	46時間44分	202
家政科G	C 2	C 1	14時間12分	191
家政科H	D 1	C 1	13時間28分	205
看護科I	A 3	A 1	18時間27分	205
看護科J	C 3	C 1	17時間19分	171
看護科K	D 1	D 1	4時間10分	185
福祉科L	C 3	C 3	3時間6分	153
福祉科M	D 1	D 1	1時間44分	93
福祉科N	D 1	D 1	1時間51分	68

専門学科は普通科とカリキュラムが異なる。2年次になると専門教科の単位数が増え、その分、共通教科の単位数が減少する。普通科では国語・数学・英語の3教科が合計15単位であるが、家政科では8単位、看護科では7単位、福祉科では5単位となる。各専門学科では、学校外での実習や検定の取得が求められる。例年、2年次のスタディサポート結果は成績が低迷する傾向にあった。しかし、今年度は家庭学習におけるスタディサプリの活用や、担任による働きかけの影響で、成績を維持・向上させた生徒が多かった。

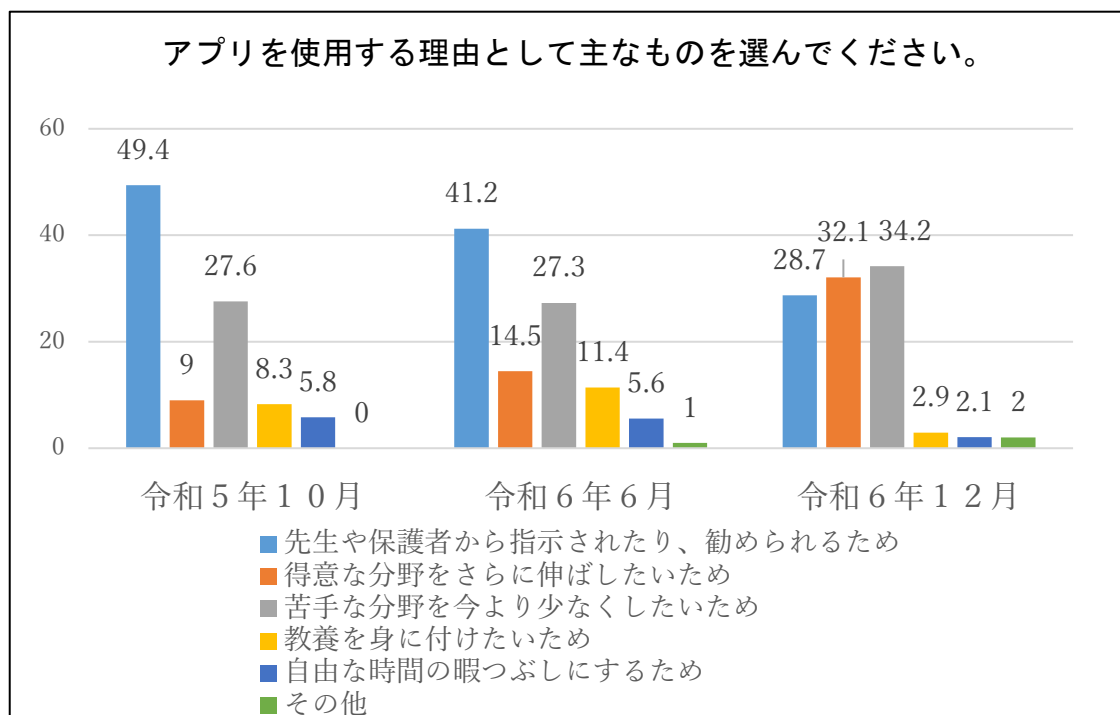
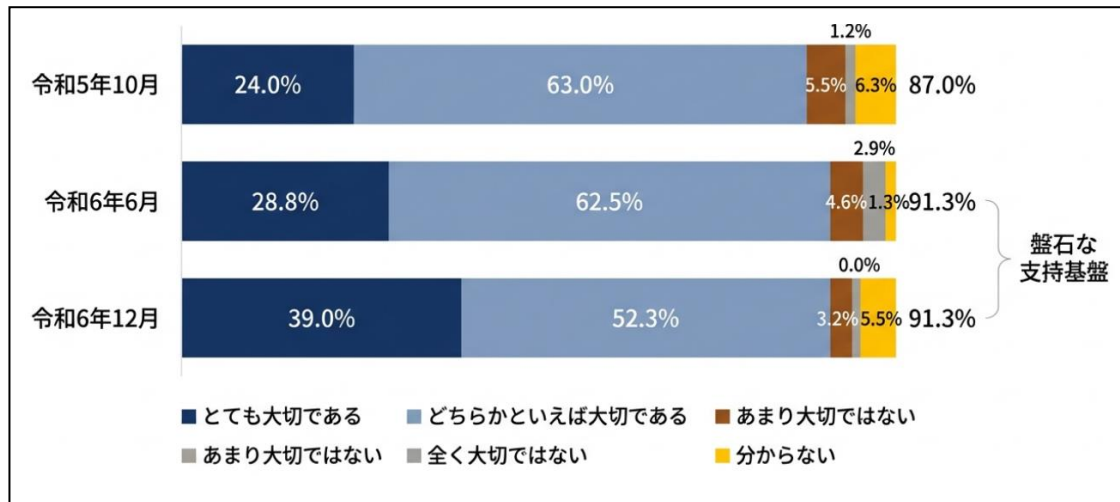
- ① **家政科**では、生徒Fは食物調理技術検定・被服製作技術検定・保育技術検定において高得点で合格している。向上心が高く、家庭クラブの役員も務めており、担任との関わりも深い。クラスの模範的な存在であるため、さまざまなことに前向きに取り組んでいる。その結果、GTZのB3という成績を維持することができた。生徒Gおよび生徒Hも、将来の夢が明確で学習意欲が高く、スタディサプリアを活用した振り返りも具体的に行っていた。その結果、10月のスタディサポートでは成績が向上した。
- ② **看護科**では、スタディサポートが看護臨地実習終了直後に実施された。臨地実習前からスタディサポートを見据え、学習計画を立てた上で担任と面談を行い、臨地実習に臨んだ。その結果、直前の学習に頼るのではなく、長期的に共通教科の学習に取り組むことができた。その成果として、生徒Iと生徒Jは大幅に成績を伸ばした。生徒Kに成績の変化は見られなかったが、自身の弱点に気づき、克服に向けて取り組む姿勢が見られた。今後、この取り組みを継続することで成績の向上が期待される。
- ③ **福祉科**では、生徒Lは将来の夢が明確であり学習意欲も高い。担任の働きかけにより、スタディサプリアを活用した学習を始めることができた。生徒Mは、医療系の専門学校への進学を考えている。基礎学力の必要性を感じてスタディサプリアの問題に取り組み始めた。生徒Nは、就職を希望している。義務教育の学習についても学び直しの必要性を担任との面談を重ねて気づき、その対策としてスタディサプリアを活用している。

以上のことから将来の夢を意識させ、学習意欲を向上させるような働きかけが必要である。また、専門学科においては、自己実現に向けた年間の学習計画を専門科目とのバランスを取りながら計画し、課題に取り組めるよう支援していくことが重要であることが明確になった。

ウ ICT活用による個別最適な学習推進モデル事業 生徒意識調査結果（岡山県教育委員会実施）

【令和5年10月 n=254、令和6年6月 n=240、令和6年12月 n=219】

「共通教科の学習は重要だと思いますか」



生徒の意識調査の結果、「共通教科をとても大切である」と考える生徒の割合が24%から39%へと15%増加した。これは、専門学科生も専門教科だけでなく、共通教科の重要性をより強く認識するようになったことを示している。また、学習アプリを使用する理由として「得意な分野をさらに伸ばしたい」と回答した生徒の割合が9.0%から32.1%へと23.1%増加した。この結果から、生徒の学習姿勢が「苦手克服」だけでなく、「得意分野のさらなる伸長」へと変化していることが読み取れる。また、令和6年12月の結果から、「先生や保護者から指示されたり、勧められるため」と回答した生徒は、研究当初より20.7%減少し、「得意な分野をさらに伸ばしたい」と回答した生徒は、23.1%増加、「苦手分野を今より少なくしたい」と回答した生徒は、6.6%増加した。これは、学習アプリが個別最適な学習を提供できる点が影響していると考えられる。従来の一斉授業では難しかった生徒一人ひとりの得意分野を伸ばす学習が可能になり、その結果、学習への意欲が高まることにも影響したと考えられる。これらの調査結果から、生徒の共通教科に対する意識の向上と、学習アプリの活用目的の変化が明らかになった。特に、共通教科を重要視する生徒が増加したことは、学力向上のみならず、進路選択の幅を広げる点でも有意義である。また、学習アプリを活用することで、生徒が自ら学習を進める姿勢を身につけ、得意分野を伸ばすという意識が高まっていることが分かった。今後は、学習アプリの活用をさらに促進し、生徒の学習意欲を向上させる施策を検討する必要がある。また、共通教科の学習の重要性を継続して伝えていくことで、専門科目とバランスよく学習できる環境

を整えることが求められる。こうした取り組みを進めることで、生徒の学力向上に寄与し、将来の進学・就職の選択肢を広げることができると考えられる。

(3) 課題

ア 基礎学力の評価方法

普通科と専門学科ではカリキュラムが大きく異なる。専門学科では、実習や検定などを通じて、基礎学力以外のどのような学力を育成できたのか学習成果の評価には多面的な視点が求められる。評価規準を普通科と専門学科で分け、それぞれの特性を踏まえた評価方法を検討する必要がある。

イ 個別最適な学習の実現

進路別課題に取り組みせしめにあたり、進路指導や面接の進め方、生徒の力を引き出すための関わり方など、学習支援のあり方について検討する必要がある。

ウ 自己肯定感の向上と自己調整能力の育成

個々の生徒の個別最適な学びを効果的なものにするには、学習に対する生徒の内的要因にも着目した働きかけが必要である。小さな挑戦と失敗を繰り返しながら、少しずつ成功体験を増やすことで、生徒の自己肯定感が大きくなれば、学習の自己調整も前向きに行えるのではないかと考えている。

5 3年目（令和7年度）の取組等

(1) 令和7年度の取組

昨年度の課題である「学習支援のあり方」の改善に向け、今年度はICTツール（スタディサプリ）の活用方法を再考し、進路希望に応じた学習サポートの充実を図った。各教科においても、授業や補習における効果的な活用に向けた検証を推進した。

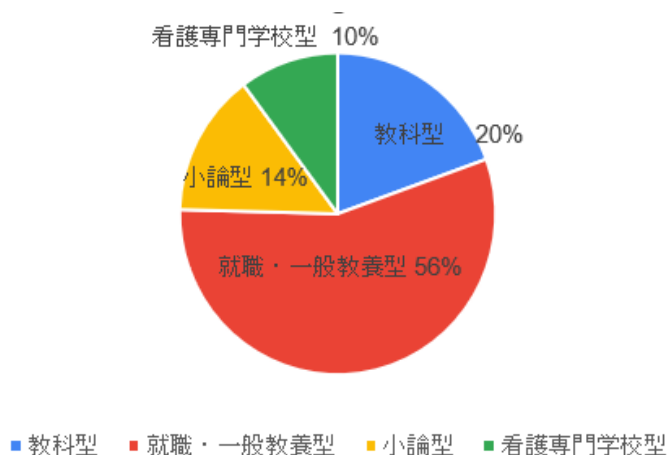
学習の継続には生徒の「内的要因」へのアプローチが不可欠であるとの観点から、校内研修では「小さな挑戦と失敗の許容、および成功体験の蓄積」というプロセスを教員間で共有した。これにより生徒の自己肯定感を醸成し、自己調整能力を伴う自立的な学習を促すことで、進路実現に向けた基盤を確かなものとした。

ア 課題配信

1、2年次では、基礎学力の向上に向けて取り組み、3年次では、進路別課題を配信して進路実現に向けて応用問題に取り組みさせた。進路希望調査結果を元に「教科型」「就職・一般教養型」「小論文型」「看護専門学校型」の4つのコースに分けて進路別課題を配信した。看護科は5年一貫教育であり高校を卒業後、専攻科へ進級をするが、進路別課題については、興味・関心のあるコースをそれぞれが選択した。

(進路別課題取り組み人数の内訳)

型	人数
教科型	46
就職・一般教養型	132
小論文型	34
看護専門学校型	24



進路別課題については、英語・数学・国語の3教科の教科担当教員と進路指導課を中心に、取り組ませたい単元をスタディサプリの中から選定し、シラバスを作成し各教科で配信を行った。

【英語】

5月の中間考査後から「教科型」「看護専門学校型」と、対象者を進路希望別に分けて課題の配信を開始した。各回の取り組み期間は2週間とし、ある程度まとまった量で、文法事項の確認/演習を目的とした。配信は定期考査の時期を避け、多くが進路を決定する10月上旬まで計8回実施した。(配信日:5/26, 6/17, 6/23, 7/16, 8/25, 9/8, 9/15, 10/6)

進路別課題配信における生徒の振り返りを見ると、1・2年次の「学習記録用紙への記入」を伴うスタディサプリアプリ利用では、「出された宿題はこなしたが、自主的な活用には至らなかった」「大事な点をメモして提出していた」といった声が多く、目の前のタスクを消化する傾向が強かった。対して3年生(令和7年度)では、「進路に必要な課題なので真剣に組んだ」「計画を立て、期限を過ぎても全課題をやり遂げた」といった記述が見られ、進路実現への意欲が学習行動に結びついた様子が見える。

【数学】

○看護専門学校型

進路別課題の配信は、数学Ⅰと数学Aの内容(数と式、1次不等式・2次方程式、2次関数(1)(2)場合の数(1)(2)、確率(1)(2)、三角比、平面図形)を春休み(3/21~4/7)に9回に分けて配信した。

9月下旬以降に看護系専門学校の受験者からの要望を受けて、損益と濃度に関する内容を配信した。(数学Ⅰの続き(命題と証明)と数学Ⅱ(式と証明、高次方程式))を大型連休(5/3~5/6)に2回に分けて配信した。

補習と進路別課題配信の対象者には、5/21(火)から毎週7校時の時間帯に数学Ⅰを中心に補習を開始した。看護専門学校や大学の過去問の演習と解説を希望者に対して行った。課題配信は、数学Ⅰの内容を6/9~8/3に一週間毎に配信した。数学Aの内容を8/4~9/21に配信した。

○就職・一般教養型

進路別課題の配信は、SPIの問題(濃度・旅人算・通過算・流水算・仕事算・売買損益)を春休みに6回に分けて配信した。中学校3年生の内容の一部(平行線と比)を大型連休(5/3~5/6)に1回配信するとともに該当箇所のプリントを配布した。

進路別課題配信の取り組み状況は、看護専門学校型で対象者の約1/3、就職・一般教養型で約1/2に留まり、単元によるばらつきが見られた。

看護専門学校型の指導では、生徒の希望には添えたものの、現状の成績より上位校を目指させるまでの踏み込んだ指導には至らなかった。進路指導においてスタディサプリアプリの活用法をより深く検討すべきであり、単に「受験・就職対策」として課題配信を行うだけでは十分な効果が得られないと痛感した。今後は授業や補習と連動させ、生徒との対話の中で配信内容を取り上げることが不可欠である。

また、生徒が自身のつまづいている単元を探す際に手間取る場面が見られたため、検索機能の充実など操作性の向上が望まれる。実力考査や模試の事前学習への活用も、今回は十分な成果を上げられなかった。

今後は、数学における個々のつまづきを解消する指導をさらに充実させたい。「数学を学ぶ楽しさ」を実感させながら、スタディサプリアプリ等を用いた個別最適な学びへと導くことが次なる目標である。

【国語】

生徒の学力や進路に応じた課題配信を行った。就職や専門学校・短大への進学希望があり、基礎学力の定着が必要な生徒には中学校既習分野の復習講座を中心に、進学希望者には、本校の教育課程上、通常授業ではほぼ取り上げることのできない古典や、現代文の発展的な講座、または小論文講座を中心に設定した。生徒たちは自分に必要なクラスを選択し、配信される課題に取り組んだ。また、教科の配信担当者は、学習履歴から進捗状況を把握し、積極的に声かけを行い取り組みを促した。

イ 授業・補習での取組

英語、数学、国語の3教科での教科別の取組を行い各教科でスタディサブリを活用した授業や補習で進路別課題の補強を行うなどスタディサブリの有効な活用を検証した。

【英語】

対象：3年1・2組、公開授業対象3年1組（31名）

内容：授業に向けたスタディサブリ視聴（3年1・2組）

配信ではなく、授業内で一斉視聴という形を取った。授業に向けて「高3スタンダードレベル英語〈自由英作文編〉第1講自由英作文の型を知る」を視聴。それに向けて、あらかじめ教員が講座を視聴し、スタディサブリのテキストを元に、重要な項目・記録に残しておいてほしい部分を空欄にした冊子を作成し、スタディサブリ講師の説明を聞きながらメモができるようにした。視聴中、生徒は聞き逃した部分があれば該当箇所に戻って確認して冊子を完成させていたり、講師の説明で重要だと思う部分に線を引いたり、蛍光ペンで色を付けたりなど、冊子を有効に活用している様子が見られた。（図1：生徒が取り組んだ冊子と英作文、図2：視聴の様子）

視聴後は、生徒は授業で使うレッスンに関連する問い：We should use majority languages. Agree or disagree? について、学んだ内容を踏まえて各自で英作文に取り組んだ。授業では、多種多様なスタディサブリ講座から、授業に活用したい講座をまず決定し、この講座を使えるように授業を組み立てる、という流れとした。

図1

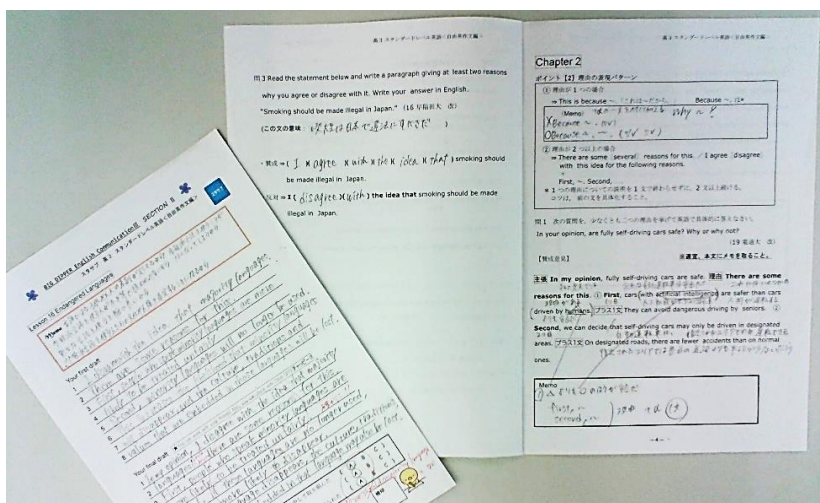


図2



また、Figjamを用いて、英作文課題に対するクラス内の意見を共有し、同じ意見の友人と協働作業も可能にする状況を作った。音読については1年生から2年生の前半までは、作成した「音読シート」を活用し、様々な形態で授業内に音読を行っていたが、教科書の英文量が増えたことで実施が難しくなっていた。そのため、イースト株式会社の「音読用アプリ Qulmee」の無料トライアルキャンペーンを活用することにした。

DMM英会話のデイリーニュースの英文から、レッスンに関連するものを選び、単語や表現、内容を参考資料として生徒と共有した。レッスンの導入や内容確認時には、Youtubeで関連する動画を探し、効果的なものを選択し、必要な部分を抽出して授業用のスライドに挿入したものを視聴させた。

以下に示す流れで準備を行い、スタディサプリを活用した授業を実施した。

時期	内 容
夏季 休業 中	① レッソンの決定 教科書『BIG DIPPER English Communication III』（数研出版） Lesson 16 Endangered Languages
	② レッソンの決定ワークシートの素案作成開始
	③ スタサプ該当講座視聴（教員）→授業用冊子作成開始
9月	上記②③継続
10月	① スライド作成開始
	② 8日 Figjam の使い方を確認する。（3-1, 3-2 生徒）
	③ 10日 スタサプ視聴用冊子配布・視聴（3-1, 3-2 生徒）
	④ 14日 EAST EDUCATION 担当者から『音読アプリ Qulmee』の使用方法について、Zoom で講習を受ける（教員）。
	⑤ 15日 （3-1、3-2 生徒）『音読アプリ Qulmee』を使ってみる。 10日から作成してきた英作文を Qulmee に英文登録。 登録した英文を音読・録音したものをアプリ上で提出する。 →評価はアプリ内 AI による。確認後生徒に返却。 （教員）ALT に、スライド・ワークシートについて意見をもらう。
	中間考査までに Lesson 16 本文読解終了（考査範囲に含める）
	⑥ 24日 （3-2 生徒対象）プレ公開授業 *音読・提出を課題とする
	⑦ 28日 （3-1 生徒対象）公開授業 *音読・提出を課題とする
11月	⑧ 5日 （3-1, 3-2 生徒）事後アンケート実施

【数学】

対象：家政科1クラス

内容：数学A「図形の性質」の内容

進路決定後の時期（2学期中間以降）に中学校の図形分野の内容を4回に分けて配信した。授業でも内容に触れ、数学を学んできた意義が伝わるように工夫した。数学Aの図形の性質の内容を学んでいく中で、必要となる中学校で学んだ内容をスタディサプリで振り返りながら授業を進めた。数学の内容を論理的に理解するには、今まで学んできた基礎的な内容をきちんと理解していることが大切であることが伝わるように課題配信を活用した。

家政科クラスでの配信課題と授業活用については、中学校の既習内容で理解しやすかったこともあり、95%という高い提出率を記録した。これは、2学期の平常点や定期考査の範囲に含めることを事前に周知した効果も大きかった。

数学科における実践では、特に「図形の性質」分野において、中学時の定理をスタサプで復習しながら授業を進めたことが非常に有効であった。進路決定後の実施ではあったが、数学を学ぶ意義を生徒が再確認できていれば幸いである。

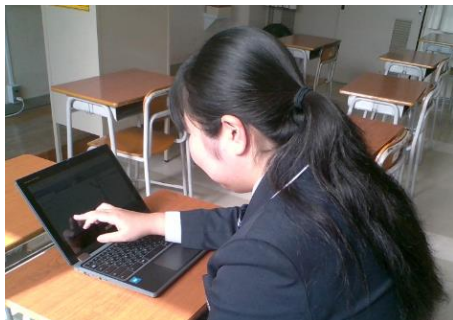
数学は小学校からの積み重ねであり、生徒ごとにつまづきや忘却の箇所が異なる。そのため、スタディサプリなどを活用して個々の課題に応じる「個別最適な学び」は、学び直しにおいて極めて効果的であると考えられる。

参考（平均点）

2学期中間考査72.5点 2学期期末考査68.5点 3学期卒業考査82.4点

参考（生徒の感想）

- ・復習しながら授業を受けると分かりやすい。
- ・スタディサプリに書き込む機能があれば便利そう。検索機能が欲しい。
- ・右側に出てくる解説が役に立った。間違えたときに解説を見て理解した。
- ・家や学校の休み時間に短時間取り組めるのがよい。15分集中して取り組んだ。
- ・授業で分からなかったところを動画で見た。
- ・計算用紙を用意して取り組んだのは良かった。



【国語】

対象：平日補習対象者

内容：個別にはスタディサプリの課題を取り組ませ、対面で内容を補強していった。

補習では、スタディサプリを用いず、教員が作成した補習教材や過去問題を中心に実施した。

生徒の進路に応じて、国公立四年制大学進学をめざすクラスと、看護系進学をめざすクラスに分け、それぞれの到達目標に即した内容で取り組んだ。

国公立クラスでは、思考力・記述力を重視した問題演習や過去問題を活用し、看護系クラスでは基礎的内容の定着と頻出分野の確認を中心とした補習を行った。教員が直接関わることで、生徒の理解状況を即座に把握し、必要に応じた助言や指導を行うことができた。

ウ 校内研修

本校生徒の自己調整学習における課題解決に向け、久留米大学医学部医学教育研究センター准教授小松誠也氏を講師に招き、「教員のコーチング力向上」をテーマとした教員研修を令和7年7月9日（水）に実施した。本研修では、従来の「指示」による指導から脱却し、「問いかけ」や「承認」を通じて生徒自身の自己決定を促すコーチングの視点を教育現場に取り入れる重要性を学んだ。教員が伴走者としてこの視点を実践することで、生徒の意欲を最大限に引き出し、自律的・主体的な学習姿勢の育成に繋げていく指導の方向性が共有された。



エ 授業公開及び研究協議の実施

1人1台端末やEdTech等のICTを学習に効果的に活用することによる学習習慣・基礎学力の確実な定着や個別最適な学びの効果等についてその成果を広く普及するため公開授業と研究協議を令和7年10月28日（火）に実施した。県内から18名の先生方に参加いただき、授業公開ではスタディサプリを活用した英語コミュニケーションⅢの授業を公開した。また、奈良教育大学教授の小崎誠二氏による「1人1台端末を活用した個別最適な学習について」と題した講演会を実施した。

○ 英語コミュニケーションⅢ「授業デザイン」

単元（題材）のねらい（目標）	<ul style="list-style-type: none"> ・危機言語を取り巻く状況を理解する。 ・危機言語の保存に関する自分の意見を英語で表現することができる。
----------------	--

本時	学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な情報、学んだことを参考にし、危機言語の保存における自らの立場を明らかにしたうえで、自分の意見を英語で表現し、学習内容の理解をより深める。 ・スタディサプリで学んだ自由英作文のポイントを参考に、自分の意見を英語で表現する。
	ねらい (目標)	<ul style="list-style-type: none"> ・危機言語を取り巻く状況が理解できている。 ・自由英作文の「型」を参考に、自分の伝えたいことを英語で表現する。
	評価規準と 評価方法	評価方法 評価規準 【思考・判断・表現】【主体的に学習に取り組む態度】 評価方法 評価基準表による自己評価 ワークシート 机間指導による観察
	教材・教具 準備等	<ul style="list-style-type: none"> ・BIG DIPPER English Communication III (数研出版) ・スタディサプリ 高3スタンダードレベル英語〈自由英作文編〉 ・授業用スライド <ul style="list-style-type: none"> ・Figjam (クラス内意見参照) ・授業用ワークシート <ul style="list-style-type: none"> ・クロームブック (受講者各自) ・音読アプリ Qulmee
	授業の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ●授業前に、本時の流れをクラスルームに配信しておく。 1. 危機言語を取り巻く状況について確認する。(5分) 2. 本時の目標を確認する。(2分) 3. 英作文に係る設定状況を確認する。(2分) 4. 3について、クラス内の意見を確認する。(5分) 5. スタディサプリでの学習内容について確認する。(3分) 6. 英作文に取り組む。完成後は音読に取り組む。(約30分) 7. 本時の取り組みについて自己評価する。(2分) 8. 次回の授業について連絡する。(1分)
授業の見どころ (今年度のテーマの視点で工夫したところ)	次のような生徒の様子が見られると考えている。 <ul style="list-style-type: none"> ・スタディサプリを活用することで、普通の授業で時間を取ることの難しい英作文の基本について事前に学び、実際に活用している。 ・様々な資料や他者の意見を参照しながら、与えられた状況を自分事として捉え、考えた内容を英語で表現しようと挑戦している。 	



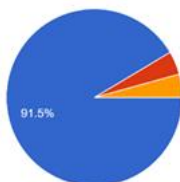
3年1・2組を対象としたスタディサプリ活用の授業実践では、併せてFigjamやQulmeeも導入した。当初は戸惑う生徒もいたが、互いに助け合いながら限られた時間でICTツールを使いこなす姿が随所に確認できた。

オ 生徒アンケートの結果

ICTによる個別最適な学び 公開授業【英語】事後アンケート

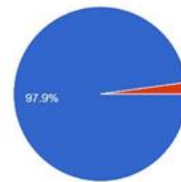
3年1・2組 (アンケート実施日 R7.11.5)

7 Figjamを使った感想を教えてください。
47件の回答



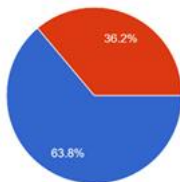
● 他の人の意見がすぐに見れて参考になった
● 入力の方が難しかった
● 使い方が難しかった

8 スタサブ用に作成した『ひよこ冊子』はどうでしたか？
47件の回答



● 使いやすかった
● 使いにくかった

9 今回の個別最適化授業に取り組んだことでの達成...達成感を感じた 1=達成感は感じられなかった
47件の回答



● 3
● 2
● 1

次に示すのは、授業内で一斉視聴した後に英作文に取り組んだ3年1・2組の生徒の感想である。

10 今回の個別最適化研究授業(スタサブ活用)に取り組んだ感想を自由に書いてください。

スタサブ

・文の書き方を知ることができて良かった。

授業の目標に絡めたスタディサプリの課題を活用することによって、深い学びや、「学習したことを使って英作文を書いてみよう」という意欲、そして、「書けた」という達成感につながったのではないかと思う。その他の手段として用いたFigjam、Qulmeeについても、3年1・2組の生徒に事後アンケートで感想を聞いた。以下はその内容をまとめたものである。

Qulmee

- ・音読できたりスペルミスがあったら直してくれたり役に立つものを活用できたので良かった。
- ・内容を考えることは少し手間取ったが、アプリを使うことで円滑に進められた。
- ・Qulmeeの音読練習でいろんな練習方法があり便利で、音読レベルが上がったと感じました。
- ・今回初めてやってみて難しいこともあったけどAIチェックとかがあってわかりやすかった。
- ・AIチェックがとても便利でした。何がどう違うのかも記入してくれたのですごく良かったです。音声の声も変えられて、驚きました。たまに声が低すぎてよく聞き取れないということがあったけど、女の子の声に変えてみると、とても聞き取りやすかったです。
- ・自分の音読のレベルを知ることができた。
- ・すぐに自分の意見を直してくれるので使いやすかったです。

Figjam

- ・Figjamを使うことでみんなの意見がわかりやすくてよかった。
- ・普段通りにできた。Figjamが使いやすかった。
- ・Figjamを使って他の人の意見や、自分と反対の意見を簡単に見れて良かった。
- ・すぐに他の人の意見を見ることができて、参考にすることができたのでとても使いやすかったです。
- ・フィグジャムで一気に全員の考えがわかり、意見を更新しながら問題について考えることができてよかった。
- ・自分とは違う意見なども知れたし、自分と同じ意見でも理由が違う人がいて面白かった。
- ・自分と同じ意見でも理由が違う人がいて面白かった。

また、以下の回答は、全体を通して生徒が自由に感想を書いたものである。その内容から、次の①～③に整理した。

分類なし／全体

①肯定的感想

- ・(スタサブの)説明が分かりやすかった。
- ・初めてやったけどたまにはこういうものいいなと思った。
- ・友達と協力して取り組めて学びにつながった。
- ・友達と協力して教え合ったり一緒に考えたりしたから授業の時間が短く感じた。
- ・いつもと違う授業で楽しかった。／楽しかった。
- ・気分転換になってよかった。
- ・普段はあまりパソコンを使った授業がないから新鮮で楽しかった。
- ・自分のペースで進めることができたので良かったです。
- ・いつもどの授業でもしないようなパソコンの使い方ができて面白かった。
- ・授業用冊子を使うことで、動画の要点が簡単にまとめられて内容がよく理解できた。
- ・みんなの意見を知れたり、自分の音読のレベルが知れてとても良かった。
- ・たまに今回の内容みたいなものを取り入れていくのもいいなと思った。

②否定的感想から肯定的感想へ

- ・英作文を作るのは思っていた以上に難しいこともあったけど、他の人の意見を知ったり、自分で調べることによって今回のテーマだった言語について知ることができてよかった。スタサブの説明も分かりやすくて英作文の作り方を理解することができた。
- ・操作に慣れてなかったときは難しかったけれど、慣れてくると使いやすかった。
- ・英文を作ることに苦手意識があったけど、スタサブやFigjam・Qulmeeなどを活用しながら授業を進める中で、自分のわからないところをすぐに解決することができ、わかりやすく楽しく英作文を作ることができた！また機会があったら同じような授業をしてみたいです。

③否定的感想

- ・慣れない授業で難しかった。
- ・英作文を自分の力で作るのは難しかった。
- ・難しかった。

生徒の感想②から、新しいアプリやツールに対する「難しさ」が「慣れ」に変わる、といった最初のハードルを超えることや、苦手意識を持っていたことに普段とは違うアプローチで取り組む機会を得ることによって学習の楽しさに繋がったり、ツールによる学びの良さに気づいたりといった肯定的感想に変わることが分かる。公開授業だからと特別なことをして終わるのではなく、普段の学びに生徒が楽しめるものを取り入れること、①肯定的感想にあるような学び合う場面を作ることの重要性にも気づくことができた。

授業担当者としては、FigjamやQulmeeの習熟が大きな成果であった。動画選定においては、教科書の内容を「自分事」として捉えられる親和性の高さを重視した。生徒の関心を引き、意欲を高める授業構成には、教員側の情報収集力が不可欠であると実感している。

公開授業に臨んだ3年1・2組の生徒にスタサブの利点を尋ねると、「好きな時に好きな単元を学べ、動画解説を視聴して自力で解決できる」「スマホで外出先でも手軽に取り組める」といった声が上がった。

アプリの活用が自走を促し、時間の有効活用に繋がっている。

また、スタサブを通じて身についた力については、「授業外での知識増」「不明点を動画やテストで深掘りする力」などの回答があり、宿題を通じた学習の習慣化も伺える。自分なりの学習法を確立し習慣化できれば、個別最適化学習は非常に有効である。

今後は、生徒がその段階に到達するまでの「教員による動機付けや仕掛け」の在り方が、重要な検討課題となるだろう。

スタディサプリの活用が特に進んだ生徒名について分析をした。

生徒Ⅰ

動画視聴時間：92時間27分
確認テスト完了講義数：460講義
問題解答数：2066問

この生徒の特徴は、中学既習内容レベルから、高校現代文のベーシックレベルまで、さらに古文漢文講座を往還しながら学習を進めていることである。スタディサポートの結果を見ると、2年生2回目がB3であったのが、3年生1回目ではA3になっている。普段からまじめで、学習にも前向きに取り組む生徒であり、テストで少しでも多く得点を取りたいという貪欲さも持ち合わせている。

生徒Ⅱ

動画視聴時間：115時間14分
確認テスト完了講義数：490講義
問題解答数：2082問

この生徒の特徴も前者同様、中学既習内容レベルから、高校現代文のベーシックレベルまで、さらに古文漢文講座を往還しながら学習を進めていることである。スタディサポートの結果を見ると、2年生2回目がB3であったのが、3年生1回目ではA2になっている。普段は学校を休みがちなどころあるが、学習には前向きに取り組む生徒である。

生徒Ⅲ

動画視聴時間：100時間21分
確認テスト完了講義数：426講義
問題解答数：1931問

この生徒は、部活動を熱心に行っている。また自宅が遠方のため寮で生活している。部活動では全国大会に出場をめざし、平日の朝や放課後、土日も練習があったり、試合や遠征等に出かけたりすることが多い。そのため、特定の曜日・時間に塾へ通ったり、学習時間を確保したりすることができない中、スタディサプリのような場所や時間を選ばずに自分のペースで学習できるツールの役割は非常に大きい。また、すき間時間を使った学習にも大いに役立っている。スタディサポートの結果を見ると、2年生2回目がC2であったのが、3年生1回目ではA3になっている。

スタディサポートの2年生2回目と3年生1回目の成績を比較し、成績が向上した3名の生徒の特徴をまとめると、中学レベルの基礎内容から高校の基本レベルまでに丁寧に時間を割いて取り組んでいることである。授業では取り扱いが少ない古典にも積極的に挑戦していることも要因の一つだと考えられる。

さらに、学校を欠席がちである、もしくは時間の調整が難しい生活環境下でも、時間や場所を選ばず自分のペースで学習に取り組めるメリットを十分に生かしていると言える。

国語科においては、スタディサプリの講座編成が教科書教材に沿った単元構成になっていないため、日常の授業内容を直接補完する形での活用は難しい。そのため、生徒が学習の必要性を実感しにくい。必要性を実感できなければ、積極的な課題への取り組みは期待できず、自走することは難しい。また、映像授業の一本あたりの時間が比較的長く、長文を読んで挑まなければならなかったり、古典が教育課程に位置づけられていないため、内容が難しい、あるいは自分には不要だと感じたりする生徒もいたことが、活用が進まなかった要因の一つではないかと考える。

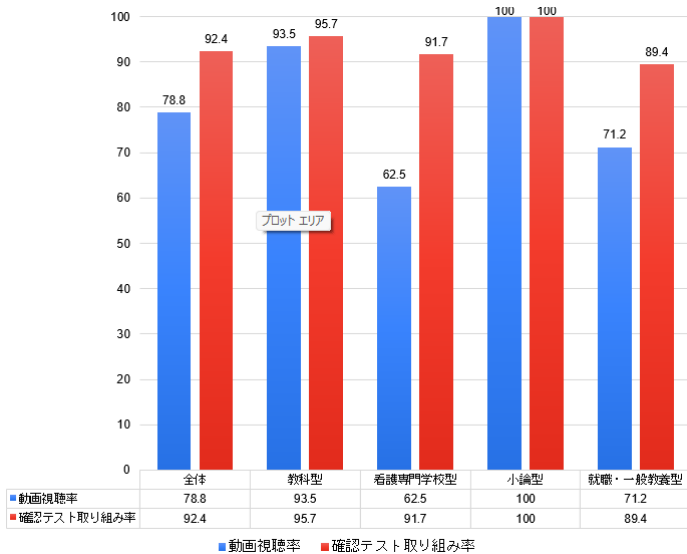
今後は、教科書の理解を補助する形での部分的な視聴や、文章構造の把握・語彙力の強化など、単元横断的に活用できる講座に焦点をあて、国語科の特性に応じた活用方法を検討していく必要がある。また、補習については引き続き教員による直接指導を中心としつつ、基礎事項の確認など限定的な場面でICT教材を補助的に活用するなど、より効果的な棲み分けを模索していかなければならない。目的別に使い分けることで「個別最適な学習」の充実を図ることができると考える。

(2) 成果

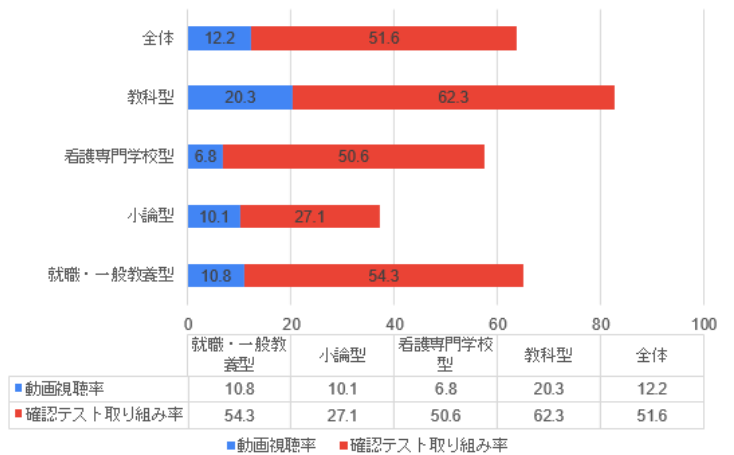
ア 学習習慣の定着

	全体	教科型	看護専門学校型	小論型	就職一般教養型
対象者数	236	46	24	34	132
講義視聴人数 (%)	186 (78.8)	43 (93.5)	15 (62.5)	34 (100)	94 (71.2)
視聴講義数	2,873	934	162	345	1432
一人平均講義数	12.2	20.3	6.8	10.1	10.8
一人平均視聴時間数	5.2	9.1	2.4	4.3	4.6
確認テスト取組人数 (%)	218 (92.4)	44 (95.7)	22 (91.7)	34 (100)	118 (89.4)
確認テスト取組回数	12,170	2,865	1,215	920	7,170
一人平均確認テスト取組回数	51.6	62.3	50.6	27.1	54.3

動画視聴と確認テスト取組率



一人当たりの視聴動画講義数と確認テスト取組回数



スタディサプリ取り組み状況を見ると、約8割の生徒が動画視聴を行っており、92.4%の生徒が確認テストを取り組んでいた。

平均値を見ると学習量は決して多くないが、一定数の継続的利用者が全体の学習量を支えている構造が読み取れた。4つの進路別課題ごとで見ると、教科型は、動画視聴率が高く(93.5%)1人平均の学習量も相対的に多い。看護専門学校型は、動画視聴率・平均学習量とも低めであった。小論型は、動画視聴率は100%だが平均学習量は相対的に低い。就職・一般教養型は、人数が最大で二極化が見えた。

○視聴時間区分ごとのテスト実施量

	人数	割合 (%)	平均テスト数	中央値テスト数
1時間未満	119	50.4	30.5	19
1～4時間	57	24.2	48.4	36
5～7時間	12	5.1	70.7	65
8～11時間	12	5.1	90.4	88
12～19時間	20	8.5	73.4	58
20時間以上	16	6.8	148.6	150

7時間以下と8時間以上で、平均・中央値ともにテスト量が一段上がることが分かる。12～19時間帯は、「動画視聴中心で反復が少ない層」と「反復を強めつつある層」が混在しており、中央値が相対的に押し下げられている。一方20時間以上の帯では「反復中心の層」への集中度が高まり、平均・中央値が再上昇した。

○テスト回数帯ごとの視聴時間

20 99回以下から100回以上へ上がるところで、平均・中央値の視聴時間が大きく伸びる。100回が反復の段差になっていることが分かる。

	人数	割合 (%)	平均視聴時間	中央値視聴時間
0～19回	76	32.2	0.6	0.2
20～49回	70	29.7	3.6	1.3
50～99回	54	22.8	4.4	1.7
100～149回	19	8.1	14.0	10.7
150～199回	14	5.9	26.7	20.9
200回以上	3	1.3	14.7	3.0

○動画視聴8時間の達成／未達成でのテスト量の違い

	人数	割合 (%)	確認テスト 取り組み回数 (平均)	確認テスト 取り組み回数 (中央値)
動画視聴8時間以上	48	20.3	102.7	111
動画視聴8時間未満	188	79.7	38.5	27

動画視聴8時間以上群の平均テスト数102.7回（中央値111回）に対し、動画視聴8時間未満群は38.5回（中央値27回）。しきい値を跨ぐと学習行動が質的に変化していることが確認できる。

○確認テスト100回の達成／未達成での動画視聴時間の違い

	人数	割合 (%)	動画視聴時間 (平均)	動画視聴時間 (中央値)
100回以上	36	15.3	19.0	15.2
100回未満	200	84.7	2.7	0.7

確認テスト100回以上取組群の平均視聴19.0（中央値15.2）に対し、確認テスト100回未満群は平均2.7（中央値0.7）。100回を超えると、視聴も実質的に増えていることが分かる。

○動画視聴時間（量）と確認テスト（質）の取組関係

	確認テスト取組 100回以上	確認テスト取組 100回未満
動画視聴時間8時間以上	25	23
動画視聴時間8時間未満	11	177

25名が、量（時間）×質（反復）を両立できた層であると考えられる。

動画視聴時間8時間以上であるが確認テストは100回未満の生徒は学習に充てる時間の確保と一人で学習を継続させることの難しさを感じていた。

確認テスト取組 100 回以上かつ動画視聴 8 時間以上の 25 名のうち 2 名を無作為に抽出し、インタビューを実施した。

αさん

令和 8 年 10 月

1. 毎日の学習習慣と計画の立て方

スタディサプリの課題は、溜め込まずに「期限内に必ず終わらせる」ことをマイルールにしています。時間がある時は一気に進めますが、他の課題で忙しい時は「明日の何時からこれをやる」と具体的な計画を立てて分散させるのが、継続のコツです。

2. 自分に必要な学びを「検索」でプラス

先生から出された課題をこなすだけじゃありません。授業やテストで「ここ、よく分からないな」と思ったら、自分でその単元を検索して追加で動画を見ています。スタディサプリは講義が細かく分かれているので、自分の苦手なピンポイントな部分に集中して戻れるのがすごく便利なんです。

3.モチベーションの源は「1年生からの志望校」

なぜ自発的に頑張れるのかというと、1年生の時から「ノートルダム清心女子大学で家庭科の先生になる」という目標があるからです。「誰かに怒られるから」ではなく、テストの順位を上げたい、そして何より「自分の将来のために必要だから」という強い気持ちが、高いモチベーションに繋がっています。

4. 「入学後」を見据えた、普通科に負けない準備

私の通う家庭科では、普通科で習うような一般科目が少ないこともあります。でも、大学に入った時に周りの子たちと知識の差があるのは嫌なんです。だから、模試（スタディサポート）などで「これ習っていない」という数学B・Cなどの単元を見つけたら、スタディサプリを使って自学自習で補うようにしています。

5. 先生のサポートとこれからの予定

基本は家で取り組んでいます。たまにうっかり忘れそうになることも……。そんな時、担任の先生が「取り組み状況」を見て声をかけてくれるのが、いいリマインドになっています。今は11月の入試に向けて面接や志望理由書の準備で忙しいですが、試験が終わって落ち着いたら、またスタディサプリで苦手科目をしっかり克服して、大学生活に備えたいと思っています！

3年次におけるスタディサプリ活用状況

進路別課題	教科型
受講講義数	141
視聴時間	57時間45分
確認テスト	191回

βさん

令和 8 年 10 月

1. オープンキャンパスでの「焦り」が転機に

進路が決まった後、大学のオープンキャンパスに参加したんです。そこで「今のうちに英語を固めておかないと、大学の授業についていけなくなるかも……」と、急に焦りを感じたのが大きなきっかけでした。それからは、スタディサプリで英語を重点的に続けています。

2. 「何からやればいい？」の迷いが解消

正直、最初はどこから勉強していいか迷っていましたが、でも、スタディサプリの動画は「自分がどこでつまづいているのか」をスッと理解させてくれるので、本当に助かっています。最近では、気になった部分を自分で調べて深掘りする楽しさも分かってきました。

3. 実感できる「英語力」の変化

コツコツ続けていたら、嬉しい変化がありました！高校の授業で、先生のネイティブな発音が自然に聞き取れるようになってきたんです。自分の成長を肌で感じられて、すごくモチベーションになっています。

4. 先生への感謝：勉強習慣がついた理由

実は、1年生で入学したての頃は「なんで課題なんて出されるんだろう？」って、意味すら分かっていなかったんです（笑）。でも、先生が粘り強くアドバイスをくださったおかげで、今では「課題は自分のためにしっかりやるもの」という意識が芽生えました。家で机に向かう習慣がついたのも、先生方のサポートがあったからです。本当に感謝しています！

3年次におけるスタディサプリ活用状況

進路別課題	教科型
受講講義数	150
視聴時間	66時間20分
確認テスト	166回

	全体	動画視聴 8時間以上 人数(%)	確認テスト 100回以上 人数(%)	動画視聴 8時間以上 確認テスト 100回以上 人数(%)
教科型	46	15 (32.6)	8 (17.4)	7 (15.2)
看護専門学校型	24	3 (12.5)	3 (12.5)	1 (4.2)
小論型	34	7 (20.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
就職・一般教養型	132	23 (17.4)	25 (18.9)	17 (12.9)

イ 学習データの相関分析

自己調整学習に関するアンケートを実施し、学習データとの相関を分析した。

・アンケート調査結果（自己調整学習に関する調査）

観点	該当するアンケート項目
資源管理 努力調整	「スタディサプリののおかげで、家庭で自ら机に向かう時間が増えた。」 「隙間時間（移動中など）でも学習できるため、時間を有効活用する習慣がついた。」 「スタディサプリは、毎日継続して学習する上でのモチベーション維持に役立っている。」
自己モニタリング 自己評価	「スタディサプリで学習した内容のおかげで、学校の授業が以前よりもよく理解できるようになった。」 「自分の苦手な単元・教科を、スタディサプリを利用して効率的に克服できたと感じる。」 「自分の学習進度や理解度に合わせて、スタディサプリで適切なレベルの学習に取り組んでいる。」 「自分の学習履歴（進捗状況）を客観的に確認することで、次の目標を立てやすくなった。」
方略使用・自律性	「スタディサプリを利用することで、教科書やノート以外の参考書を自分で選んで学習する力が身についた。」 「スタディサプリの担当講師の授業動画は、学校の先生の授業とは違う視点で学ぶことができ、理解を深めるのに役立っている。」

・教員の関与や学習行動と自己調整学習の相関

	自己調整学習（尺度）						n
	資源管理・努力調整		自己モニタリング・自己評価		方略使用・自律性		
	ρ	P	ρ	P	ρ	P	
教員の関与度	0.248	<0.01***	0.416	<0.01***	0.337	<0.01***	194
学習行動（確認テスト）	0.102	0.171	0.156	0.035*	0.145	0.051*	182
学習行動（視聴時間）	-0.001	0.984	0.108	0.133	0.092	0.200	194

※ * $p < .05$ 、** $p < .01$ 、*** $p < .001$

教員の関与度は3尺度すべてと有意な正の関連があった。特に「モニタリング・自己評価」が最も強く、関与が高いほど「理解の自己点検や目標設定」が高まる傾向にあった。このデータから、デジタル学習ツールに活用において自己調整学習ができる生徒を育成できるかどうか大きな影響があるのが、生徒への教員の関与度であることが示された。本事業において、教員全体で生徒の学習に向き合ったことは、生徒の学力のみならず自立した学習者としての成長において確かに肯定的な影響を与えていたことが再確認できた。

一方で、確認テスト完了数は「モニタリング・自己評価」で弱い正の関連があった。また、視聴時間は3尺度と有意な関連は弱かった。短い学習サイクルで視聴→小テスト→誤答振り返りを教員の働きかけで設計することが行動に結びつきやすい構造が確認できた。

6 3年間の取組総括

(1) 得られた所見等

3年間のデータを通して、以下の4点が大きな成果として確認された。

ア 「学習量の確保」と「反復学習」により、一定層の学習者が学力向上を実現したこと

動画視聴8時間以上・確認テスト100回以上の「量×質」の両立層が全生徒の約1割に形成され、特に教科型では複合達成率が15.2%と相対的に高かった。これらの生徒では、学習量の伸長に応じた成績の向上が確認されており、ICTを活用した反復学習が学力保障に有効であったことが示唆された。

イ 学習習慣の二極化が見られ、学習支援の重点化が必要であること

動画視聴は約8割が実施していた一方、約2割は視聴が進まなかった。特に就職・一般教養型では学習量の個人差が顕著であり、資源管理・努力調整の尺度が低いことから、学習習慣形成に対する支援・リマインド・目標の細分化などの仕組みづくりが求められる。

ウ 教員の関与が生徒の自己調整学習に強く影響すること

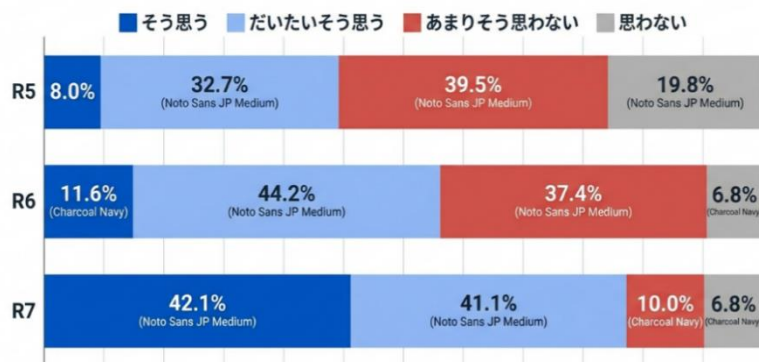
教員のフィードバック頻度と、生徒のモニタリング・自己評価・方略使用には有意な正の相関が確認された。特にモニタリング（理解度の点検）とテスト回数との関連も見られ、「視聴 → 小テスト → 誤答振り返り」の短い学習サイクルを教師が設計・支援することが、生徒の学習行動を改善する鍵であることが明らかとなった。

エ 進路別の学習課題設定により、目的に応じた学びが促進されたこと

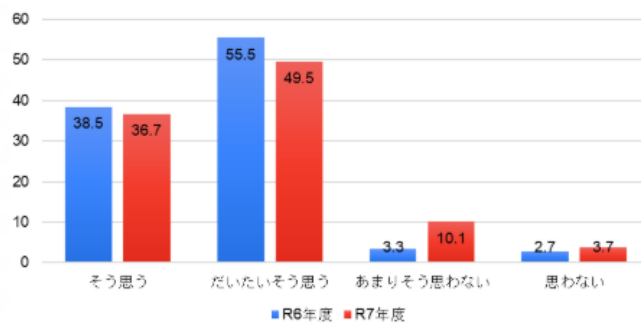
進路別課題は、生徒が自ら選択した学習コースで学びを深める契機となり、特に教科型では視聴・テストとも高い取組が見られた。一方で看護専門学校型では学習量が伸び悩む傾向があり、専門学科のカリキュラムと基礎学力学習の両立をどう支えるかが次年度以降の課題として浮かび上がった。

以上から、本校における個別最適な学習の実現には、ICTを「個人の学習の自律化を支えるツール」として位置づけつつ、教員による伴走的支援や短サイクルの学習設計が不可欠であるという知見を得た。

先生と進路に関する話ができています



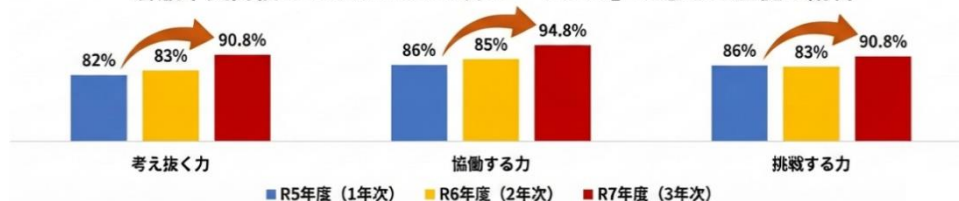
授業でクロムブックを使うことにより学習意欲を高めることができています。



進路決定への満足度 (R8.1) 約70%



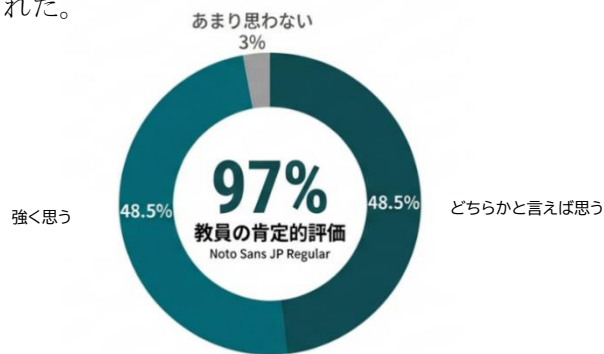
倉敷中央高校でつきたい3つの力が「ついた」と感じた生徒の割合



(2) その他

ア 校内研修の蓄積と教員文化の変容

3年間のICT研修や公開授業を通じ、教員の中に「学習ログを基に指導改善を行う」「事前学習と授業を接続する」といった意識が広がった。授業外での学習データを教材研究に生かす姿勢が定着し、教科横断で協議する文化が形成された。



「今後もICT個別最適学習を実践したい」

イ モデル校としての知見発信

県教育委員会や他校との情報交換会へ参加し、成果や工夫を共有した。生徒の学習ログ分析や進路別課題の運用方法などは、多様な学科を持つ学校としての特色ある実践となり地域のICT活用推進に寄与した。

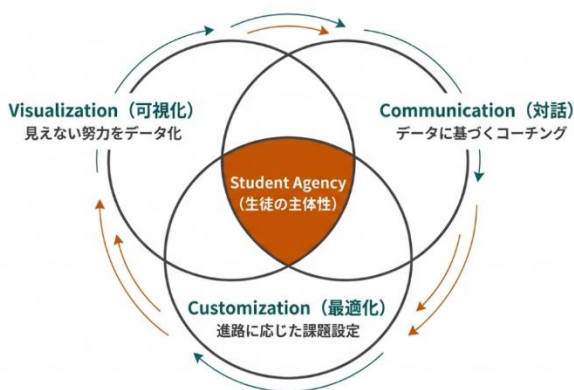
ウ “個別最適”と“協働的学び”の同時実現に向けた基盤形成

スタディサプリによる個別学習が進む一方、授業内ではグループ活動・探究活動への接続も進み、「個に応じた学び」と「対話による深い学び」の両立が徐々に実現しつつある。

7 おわりに

本校は3年間にわたり、ICTを活用した個別最適な学びの実現に取り組んできた。学習データの分析から、生徒一人一人の学習行動の特徴が明らかとなり、学力・進路・心理的側面を横断した新たな指導の方向性が見えてきた。ICTはあくまでも手段であり、生徒の学びを支えるのは最終的には教員の伴走と対話である。本研究で得られた知見をもとに、今後も生徒の学習意欲を育み、自ら学習を調整できる力を育てていくことが求められる。

令和8年度以降も、学習ログの活用、進路別課題運用の改善、自己調整学習を支える仕組みづくりを一層充実させ、すべての生徒が「自分の学び方」を身につけ、主体的に未来を切り開く力を育成していきたい。



8 巻末資料

英語科でスタディサプリのテキストを元に、重要な項目・記録に残しておいてほしい部分を空欄にした冊子と授業用ワークシート

参考・引用文献

- 栃木県総合教育センター. 学ぶ意欲をはぐくむー「学習に関するアンケート」を活用してー. 平成23年3月
- ヤナ・ワインスタインメーガン・スメラック オリバー・カヴィグリオリ 山田祐樹監修 岡崎善弘訳. 認知心理学者が教える最適の学習法 ビジュアルガイドブック. 東京書籍. 2023
- 櫻井茂男. 自律的な学習意欲の心理学. 誠信書房. 2024